

第23回研修会事例報告②

大学院生との連携によるラーニングアドバイザー制度 — 立教大学図書館における学習支援の取り組み事例 —

立教大学新座図書館 鈴木 加奈子氏

1. ラーニングアドバイザー制度とは

ラーニングアドバイザー（以下LA）制度は、図書館が提供する学習支援サービスの1つである。ピアサポートの形を取り、大学院生がアドバイザーとして図書館に常駐し、自らの学習・研究経験をもとに学部生からのレポート・論文作成などの質問に対し、図書館資源を用いながら答え、学部生の情報リテラシー獲得のため支援を行うものである。計画当初より各学部との協力体制の中で制度を位置づけることを念頭に置き、LAの募集や広報などにおいても学部の協力を積極的に呼びかけている。2008年10月、池袋キャンパスにおいてスタートし、2009年12月に新座キャンパスでもサービスを開始した。



※参照 : <http://www.rikkyo.ac.jp/research/library/learning/advisor/>

2. 新座図書館におけるラーニングアドバイザー制度

新座キャンパスには観光学部、コミュニティ福祉学部、現代心理学部の学生が在籍している。LA制度開始当初は専門領域に特化した形ではなく、情報収集からレポート・論文作成まで幅広く汎用的な相談に対応するサービスを行ってきた。その後心理学部からの要望に応え、2010年6月から心理学のもつ特質的な相談内容にも対応できるよう、心理学研究科の大学院生をLAスタッフに加えて体制を整えた。

全体的な利用傾向をみると、4～5月が最も多く1年生の利用率が高い。なかでも観光学部、現代心理学部では早い段階からレポート課題が課せられることもあり、相談者が多い傾向にある。4、5月には図書館利用ガイダンスの一環でライブラリーツアーを実施しており、その中でLA制度を紹介していることや、授業内検索講習会における広報も効果をあげている。また、質問内容で目立つのが「レポートの書き方がわからない、どこから手をつけていいかわからない」というものである。これらの質問に対しLAは「感想文」と「論文」の違いを示し、レポートでは「文献で述べられている事実や知見」に加えて「自分の意見」を述べる、という手順で説明をしている。リピーターになるとレポートの進捗状況に合わせて、より良いレポートを

目指す意欲的な質問に変わっていく。リピーター増加に貢献したのは、「分からないことがあったらいつでも来てください」という、LAの一言であった。

LA制度の実施により、従来のレファレンスでは対応しきれなかったレポートの書き方に関する学習支援に対し、図書館として一定の成果を上げることができた。

一方、課題となっているのが後期利用者の伸び悩みである。解決策として、教員の理解と協力のもと、授業内でLA制度を紹介するなどの広報強化がある。その上で池袋のLAとの連携も視野に入れ、ライティングサポートの1層の充実を図る必要がある。

3. 新たな新座図書館学習支援スペースの紹介 (2012年4月オープン予定)

各学部の教員、新座キャンパス事務担当者、図書館スタッフとの連携により企画を行った「(仮称)新座図書館 ラーニング・commons」は、新座図書館では初めてとなる「グループ学習」のためのエリアである。機能が異なる3つのエリアで構成し、自由に机や椅子を組み合わせてグループ学習を行う「グループエリア」、図書館企画の講習会も実施することができる「多目的スタジオ」、授業の準備に利用できる「グループ学習室」(4室)がある。「グループ学習室」ではAVを視聴する、事例研究やプレゼンの練習をする、また、模造紙を広げてワークショップの作業をするなど、学部の授業内容に即した様々な用途に対応できるよう工夫している。以上のような施設設備に加え、LAスタッフがより積極的に学習支援を行えるよう、LAカウンターを移設することでソフト面の充実も図っていく。

4. 立教大学図書館で行っているその他の連携サービス

その他の連携サービス事例として、学部の授業一コマを担当する授業内情報検索講習会、メディアセンターとのノートPC貸出連携、キャリアセンターとの情報共有及びキャリア情報パスファインダー作成、ボランティアセンターとのボランティア関連図書一覧のHP掲載、大学教育開発・支援センターとの学習支援連携や共同シンポジウム開催などがある。

以上、本学図書館のラーニングアドバイザー制度について概要を紹介した。本事例報告が、図書館における学習支援の1つの参考になればと願っている。